

## 創刊号の発刊に寄せて

古代アメリカ研究会会長  
大貫 良夫

古代アメリカの研究に志し、また古代アメリカの文化とその歴史にさまざまな視点から関心を持つ人達が集まって、研究会を作ろうと数年来準備を重ねた末に誕生したのが古代アメリカ研究会である。会員はまだ100名に満たない小さな会である。また、若い人達が多い会である。

しかし、若さは力である。活力である。向こう見ずの若氣と言われようとも、真摯にして前向きな姿勢とその背後にあるエネルギーは、年寄りには持てないものである。その姿勢とエネルギーをもって私はモラルと言いたい。

何事も草創の時代はこのモラルが高揚している。逆に言えば、高揚したモラルがあれば、それを共有する人達の成そうとしている仕事は成功する。古代アメリカ研究会がどこまでモラルを高め続けられるか、それは会員の気持ち次第である。

戦前、そして戦後の厳しい時期に、先達の学者達はモラルを高くして活動した。書物を買うお金もなく、論文を書く紙にも不自由した。当時の人類学や考古学、民族学の出版物を見れば、いかに不自由であったか、それは一目瞭然である。今の時代のような容易なコピーの技術はなかった。各自は自分でノートをとって要点を記し、トレーシングペーパーに写し取ったり、少し余裕があれば写真に撮ってそれを自分で焼き付けし、製本したりした。20数年前のこと、ロシアの学者から、ある本が入手できず困っていると聞かされ、全ページを写真に写し、そのネガを送ってあげたことがある。今でもその学者とは文通をしているが、一度もペルーの土を踏むことなく、それでも研究を続けてきている。戦後20年くらいの頃は日本で海外の事物を研究する人達も同じようなものだった。

それに比べれば現在の日本のわれわれははるかに条件がよい。そして若い人達に高いモラルが維持されれば、何事が成らざらんである。古代アメリカ研究会が大きく育つことに役に立つならば微力なりともお手伝いしようとして会長をお引き受けした次第である。

大きく育つとは単に会員の数が増えることとは違う。そこにはいろいろな意味が含まれると思う。ひとつには会員の研究が国際的なレベルで評価されるような成果を生み出すことである。幸いにして少なからぬ若い会員は現地調査や海外での研究の経験を有しており、外国の研究者との交流を深めている。日本の中だけに顔を向けているのではない。この点はいへんに心強い思いがする。

もうひとつには、研究だけでなく、古代アメリカの文化への広い関心にも応えられる研究会に育つことが必要である。考古学や人類学の研究者ではないが、古代アメリカに深い関心を持つ人も多い。この人達との交流は研究者とそうでない人双方にとって有意義である。研究者は仲間内でのひとりよがりや自己満足の陥穿に落ちる危険を少なくできるし、それ以外の人も独善や独断の危険を回避できる。また、双方とも視点の違いを知り、視野を広めることができる。

さらに、そのような多角的な視座の中での議論もまた、知識を広め、発想の幅を拡大することにつながるだろう。大きく育つとはこのような意味である。

さて、本研究会は会則を作って発足し、編集方針を固めて、会誌を発刊する運びとなった。ここ

までに努力を傾聴された役員と会員に敬意を表する。今後の発展を期したい。

本会も会誌も産声をあげたばかり、成長はこれからであり、いわば本会は他の学会や研究会に比べれば発展途上の第一段目にいるにすぎない。規則その他柔軟に構えてよき発展の道を探してゆかねばならない。どこかにモデルを探す必要もあるまい。われわれの独自性を探して一向に差し支えない。幅のある内容の会誌に育ってもらいたいものである。

かといって、最低限のレベルは保たねばならないのは当然で、そのための努力は必要だ。第1号は、準備の時間の都合もあって、編集委員会の方から執筆者を選定し、依頼した。今後は会員からの積極的な寄稿を期待する。それが十分でない場合は編集委員会から執筆者を選ぶこともある。会員諸氏のご協力をお願いします。

創刊号の発刊に際しては、編集委員の関雄二氏が、諸事多忙の中を献身的に仕事を進めてくれた。その労には会員の全員と共に感謝したい。会誌も会も会員ひとりひとりが力を尽くさねば挫折してしまうだろう。また、財政はほとんどゼロに近い予算で運営せざるをえない状況であるから、無償の手仕事が多くなろう。まさに古代アメリカ文明のごとく、手作りでゆかねばならないだろう。役員に任せるのではなく、役員と会員がひとつになって会を運営し、会誌を作ってゆかねばならない。前途遼遠、しかしピラミデもしっかりした基壇があってこそ高くなる。われわれは基壇すなわちブラッタフォルマを築きはじめたのである。

平成 10 年 4 月